都林泉名勝圖會

五

426

都林泉名勝圖會巻之五

目録

嵯峨小督隠家
七老亭 亀山
同寶品虫干体
獅子岩 後醍醐帝御影
大井川三船御遊
宗祇舊庵
定嗣卿古蹟
桂川船遊
初卯参
泉之坊
椶櫚坊
亭子院り巻
亀山院御影 大悲閣
雲居庵
眞乗院
嵐山花盛
道令法師趾
桂里園林堂
男山 八幡八景
安居頭
松巷堂
山下金剛院
天龍寺方丈
同十景
妙智院 策彦和尚 開山堂
亀山殿舊蹟
法輪寺十三参 渡月橋
粂室西方寺
清原元輔家
放生會式
瀧本坊
萩坊
淀屋巨庵蹟

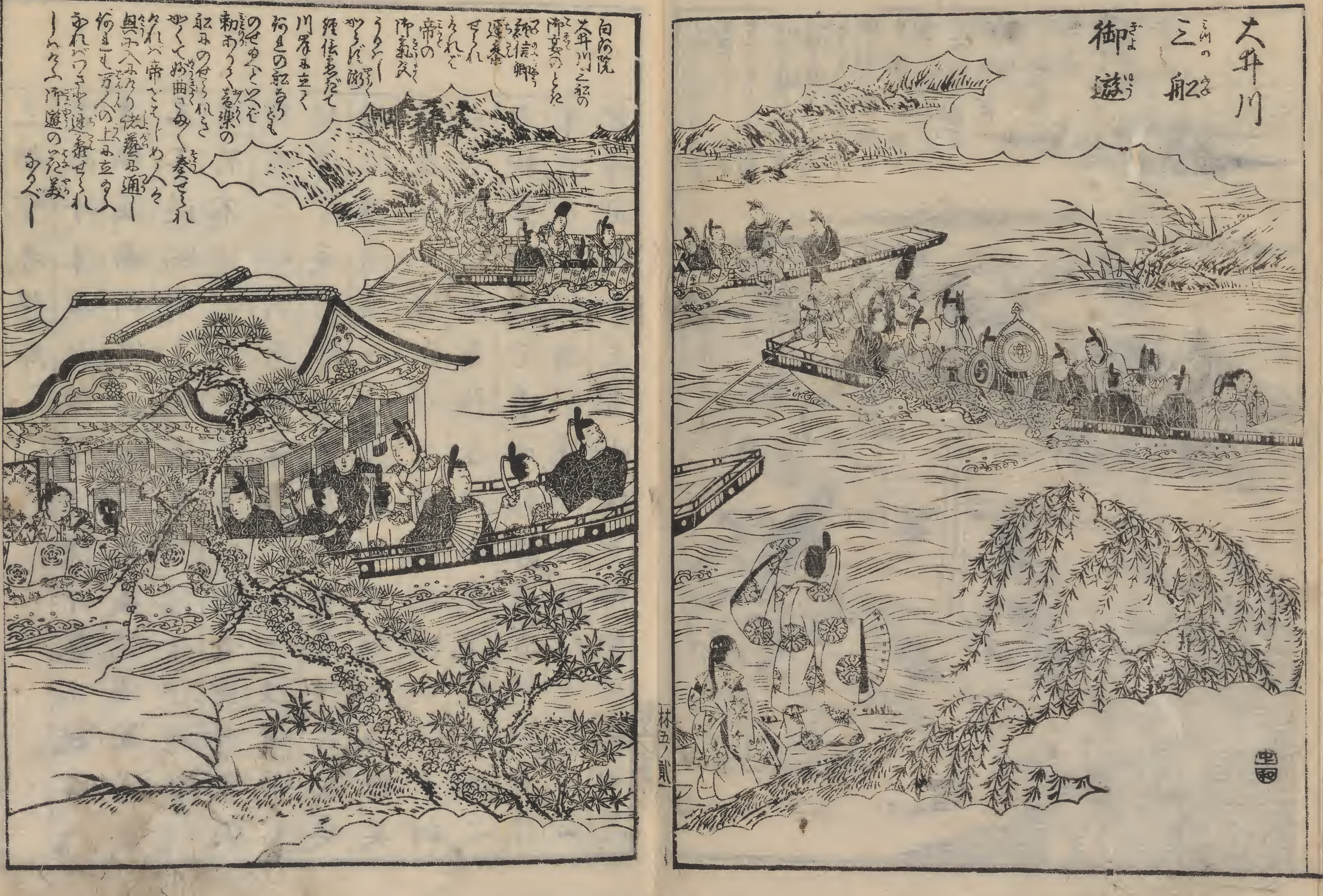
754
.94
5

山崎妙喜庵
芝山手水鉢
陽泉亭
京屋弥生興

茶室
山崎城跡
不衣城
藤屋月興 秦嫂之好茶亭

袖摺松
相應寺古蹟
弥生花寄
角屋雪興 臥龍松曲水亭

都林泉名勝圖會巻之五目録 終


大井川之船御遊
白河院
大井川に船の
御宴のとき
帥経信卿
遅参
せられ
されど
帝の
御気色は
うるはし
からず漸
経信きたりて
川岸に立て
何れの船なりとも
のせよとぞ
勅ありて管楽の
船の方へられしこ
かくて妙曲を奏せられ
されバ帝をはじめ人々
興に入られ後藝に通し
給ひし方人の上に立つ人
あれバ三事に達し兼せられ
しれども御遊の花義
あるべし
林五ノ貳

三舫賞春詩序

寛政十年歳在戊午時値仲春日期念八連朝淫雨新霽西堰櫻花盛開偶聞伶官名工泛舩賞春因從羣賢諸子追蹤從行並皆不詩則倭歌不書則丹青聚合衆態併成三舫仰芳於嵐嶺泝舟于桂河棹兮碧潭之花影纜曳青崖之茗香清樂交奏雅詠時間用助文藻之妙思觴酌互勸笑謔屢闌以適歡娯之逸致跡繊同道長材或遜經信良會雖屢佳期多違恍茅獨之韋繼恨遅景之易没頓雖昔賢無同茲懷耳況分律韻得七陽以寓鄙情于八句云

翠嶂風開雲冪香山陰景轉碧川長四堪

清興闌絲竹三舫歡情見羽觴霞遂曲聲依幕落波隨醉態向艤狂昔賢勝蹟今安在四首春天惜夕陽

平安皆川愿題 [淇][園]

花乃日さくらのかりの岸わく
[illegible]

富士谷 成元

此詩今ハ淇園先生及ビ小舟宗匠の自筆にて[illegible]

誹諧漢和表六句賦嵯峨名所和陽韻賞嵐山花

嵐山領櫻花擁三舫
[illegible]
詩成大遁陽炎燎
歌詰橋急彩貴長
吹あらく蘿の馬場か原落て
小暫の河せハみ那波の牆
、、、、、、

蘿[illegible]

天龍寺
方丈林泉
其一
嵐山
亀山
大悲閣

天龍寺 五山の其一なり 下嵯峨大井川の北岸にあり 此方丈の林泉は開基夢窓國師みづから
作りたまふ亀尾山といふ山は大堰川戸難瀬瀧を庭中の荘りとして山気の
妙境なり山門を普明閣と號し集瑞軒の蓮池と曹源池と称す亀山の
麓より水脈通じて炎暑にも涸ず松洞は亀山の東北にあり松樹ふかく
龍門亭は多宝院にありて戸難瀬に向へり其名ならびに妙智院の
庭中は僧良策彦の造る所也其人大明に渡る其時南倉宗桂と父なり以の
還りて将軍より大悲閣の碑文をかきて集瑞軒は方丈の書院をいふ

てら庵ある方丈の集瑞軒より名のあるる夕日
あらし山の松みゆるしき

家集
ちりかゝる花の中にみゆるあらし山松と櫻をわかれる　夢窓國師

霊庇廟は鎮守八幡宮をいふ絶唱渓は大井川をいふ三級巌は戸難瀬瀧
三曲に落る亀頂塔は亀山の巓にあり嵐山の峯を拈華嶺といひ大井の
橋を度月橋といふ 大橋図云亀山殿のまへ大路筋にあり今の橋乃西上を断橋といふ已上當山十境開山夢窓の頌あり

宜竹集 渡月 八万三千戸於彼心 有水皆月
架七十二丈橋於硐底 赤霄何虹

其二
開山夢窓國師
作らせ給ふ庭中之

天龍寺什寶於客殿虫干圖

南西ノ間　開山所蔵

袈裟　白地古金襴
　　　金地二重蔓大牡丹

袈裟　丹地冨田

袈裟　紗　震旦楊岐禪師所持
　　　　　歴二十七世ヲ夢窓國師傳來

袈裟　紫地銀襴　国師天龍寺供養ノ
　　　時賜ニ紫衣ヲ一

南東ノ間西側　墨蹟類

国師空谷　二大字　一文字萌黄地

国師笑山　同

国師春屋　同　中茶地

同頌　同　一文字花色地

南東向北側

黙翁頌　中字横物
　　　　一文字花色地小牡丹

圓光経文

梵音閣頌　一文字紫地紗
　　　　　中白地小牡丹

北叟頌　一文字
　　　　紫地紗

垂楊頌

宋舩綱司頌

南禪退院頌

平田頌　一文字
　　　　白地大牡丹

南東向南側　開山墨跡

十願文　二幅對

和菴主頌

應無
雨生　二幅對

飛空鳥　二行艸書

日本拜頌　三行物

修多羅教　細字横物

宸翰案文　横物

同東側

開山
御手状　種竹和韻

鐵舟墨蹟　三尺黒敗横物
　　　　　和[illegible]　二幅

二ノ間

開山像 自賛

開山像 自賛

佛国国師像 開山賛

初祖大師 佛照賛

呉道子観音

馬祖大士 蘋漢臣

国師 自賛

国師 同

国師 同

亀山院 御歌切

同

後醍醐帝 御哥切

馬遠 雪舟 能峰 貳幅

舜挙 虎

顔輝 龍

同

邊文進 花鳥

四幅

開祖像 虚堂賛

黄龍 空谷賛

仰山 笠宅賛

高峰

中峰

興化 平石賛

佛光祖 墨蹟

佛国 墨蹟

総海 墨蹟

同

同

清渓 墨蹟

同

五幅

三ノ間

右 虎

觀音大士 陳不翁 三幅對

左 龍

羅漢 李龍眠

蘆雁 徽宗皇帝

蘆鷺 林良

蘆雁 盧朝陽

山水 唐画

芙蓉 周之冕

普賢大士 張思恭

四睡圖 無準賛

不動尊

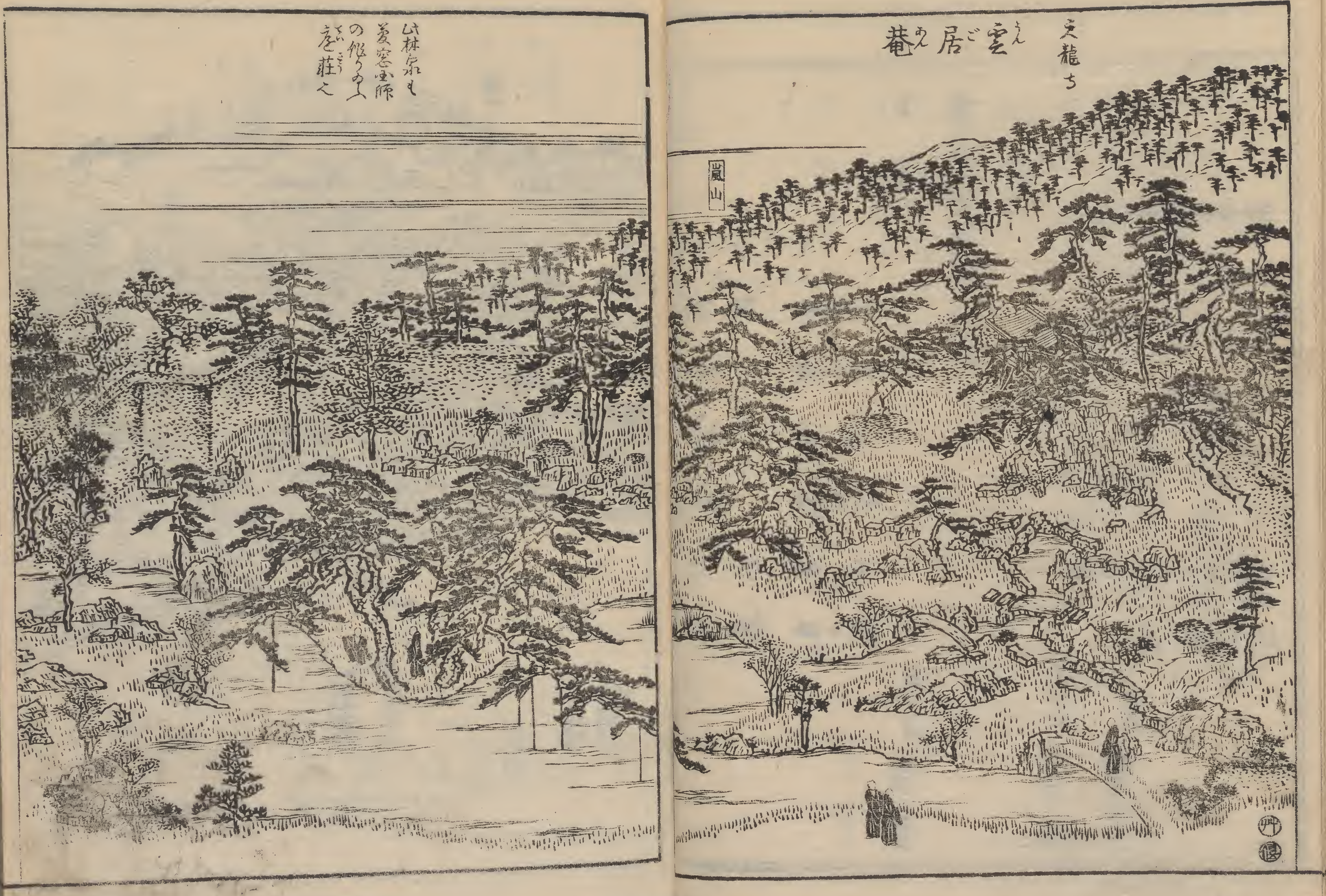
文殊大士 北磵賛

達磨 無準賛

山水 馬一峯

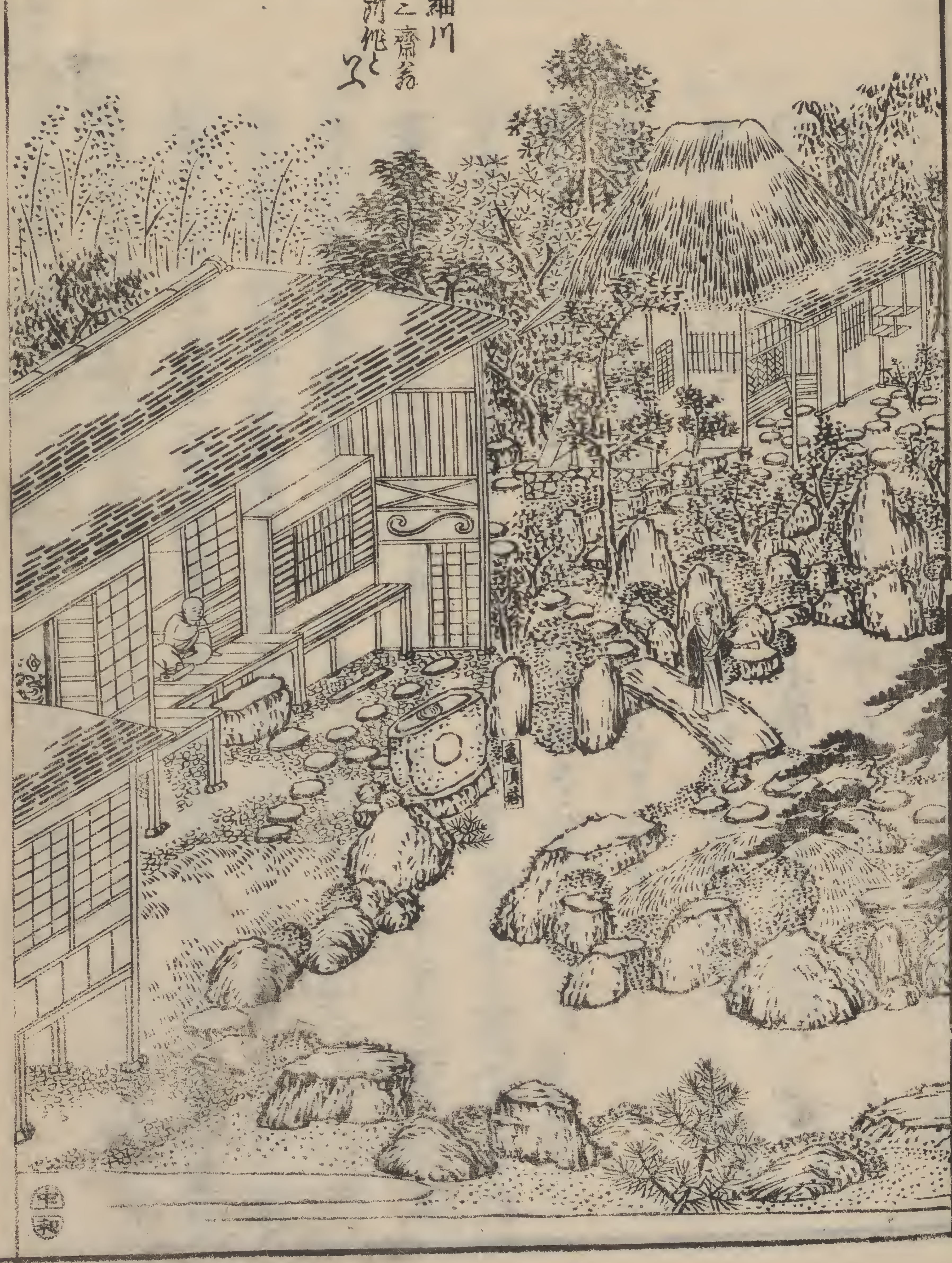
壺公仙人 唐画

王元章梅


天龍寺
雲居庵
嵐山
山林泉石も
夢窓国師
の作られし
庭荘之

大龍寺
塔頭
妙智院
林泉
策彦和尚
前池

嵐山
策彦和尚
開山堂


細川三斎翁所作と云

天竜塔頭
眞乗院
林泉

亀山殿舊跡 又嵯峨殿とも称し東ハ今の天龍寺方丈に當り南ハ大井川西ハ亀山北ハ臨川寺に限る

撰集抄云
さてかの亀山の麓大井川の水かみにあたりて新しく院をたてさせ
給へるところの山かけ戸難瀬の滝もさながら御垣の
内にみえてわざとならずしてはや流れ出せんとせしもそのつくりたてたる詞
のかゝりみえし哉 絵所とても筆をとゞめつべし 同書云 きんでんの
あるひは六角の御所あまたありて西に薬草院ひがしに如来寿量院など
もあり天王寺の金堂うつさせ給ひて多宝院とぞ申しける
さる大多勝院とかやゆる深心院の御持仏をうつさせ給へりて 同書云
亀山殿の桟敷殿に九月十三夜御歌合を催せられし
外よりハしられもせじの深き色はうつらふ山の紅葉にて 山の紅葉 本院御製
いはねのきのあらしの山あるにはゆかしく落る瀧津瀬 かめ山の仏洞にて 亀山太上天皇
大井川ちりてもみちを浮ぶぬ秋の色ハ見えけり 和仁元年亀山殿十首に河上暮秋 左大臣
この世のかれふ世のためしはなれなく山の名をふ文作りそり 亀山宮 為家

大井川 山城 三代實録云伊勢斎宮内親王臨葛野川（大井川の次）禊勅使中納言従二位兼行左衛門督藤原朝臣監禊事
亭子院の御時（五十九代の帝 宇多天皇なり 亭子院とも 又寛平法皇とも称し）昌泰元年九月十一日
大井川にみゆきありて帝をはじめ諸卿和歌を詠じ給ふ 紀貫之も供
奉しまうく 此集の假名序を書れし事著聞集にみえたり 又
圓融院の御宇（六十四代の帝）御堂関白（兼家公の二男 藤原道長公）大井川にて逍遥の時詩歌の舩
と分ちおのおの堪能の人々をのせられけるに四条大納言にあへせられて云 いづれの
舟にのるべきとのたまひければ公任卿云 和歌の舟にのるべしとて其折に
朝まだき嵐の山のさむければ紅葉の錦きぬ人ぞなき 公任
後に宣ひけるは 作文の舟にのるべかりけるものを 是ほどの詩を作りて名をあげましかば くちをしかりける
しかも詩の舟に乗て是ほどの詩を作て名をあげましかばと
後悔せられけり 此歌花山院拾遺集撰せさせ給ふ時紅葉の歌に
入られたりし 作られたる歌撰びて見ゆ さればこそ三年の後に
入集ありしを これを大井川の三舩の基なるべし 十訓抄大意

大井川の三船といふ事　白河院西川〈大井川の一名也〉に御幸の時詩哥管絃の三の船を浮べて其道々の人々を分ちて乗せられけるに帥民部卿経信卿遅参の間おほかた御気色あしかりけるに経信はからひまいりてなりたるが三事兼たる人なく汀にひざまづきて何れの舟にまれよせ給へといはれたりける時に取てかみしもなりかくいはん料にかねて遅参せられたるになむ作りく管絃の舟に乗て詩哥を献せられたりけるに大堰川の三の舟の御遊ひとく大鏡あるへ十訓抄なとにて才能の部に載られたり

本朝文粋

暮秋泛大井河各言所懐和歌序　江匡衡

寛弘之歳秋九月蓬壺侍臣二十輩合宴亀山之下大井河之上或高談艶語或縁竹觴詠沙鷗與鴛鸞狎近紅葉與紈綺紛檪於戯今日之興今日之情不倫好遊誇四海之無事也不偏好眺望覩三晨之有年也臟舩者攝州刺史盡水陸之珍趁令者翰林主人兼花鳥之事于時山水秋深若靈夢者有八九煙嵐日暮記風物以難一二懸詠和歌聊慰老思其詞曰云云

新拾遺
ちりぬれど又しにほひて大井川岸の山吹今さかりなり　季経

續後撰
大井河まれの御幸に年ふりぬもみぢの舟路跡はありけり　定家

續古
とも見ちる人は入江の松にしもいかなれはかは昔契りけむ　前内大臣入道

玉葉
大井河岩波たかくよせられてくいのこの麻にあやしくきこえける　俊成女

續後拾
大ゐ河井せきの水やみたるらん早瀬にちれる年ぞ下ゆく　寂蓮法師

嵐山（あらしやま）大井川の南にあり大悲閣は嵯峨道七町許にあり山中櫻多し詠せの盛には都下の騒人きて遊宴す

亀山の仙洞に吉野山の櫻をうつさせ給ひし
植つくしける花の咲けるなりとぞ

續古
春ごとに思ひやられしみ吉野の花は今日こそ宿に咲けれ　太上天皇

亀山七百首
あらし山峯よりいづる月影にさえて瀧の音ぞすみゆく　前大納言宰相公明

新千載
かしこきはいとゞ名のみやあらし山花の下とふ名をぞ惜しまん　前関白

續千
見わたせば雲のひきもちし嵐山雪にきえてさえ清月のかね　為道

五鳳集
嵐山看花
城西三里是嵐山
二十年來百往還
人已數莖新白髪
花猶一笑舊紅顔
瑞渓

大井川
清流奇石繞叢篁
隊々香魚往復還
忽有樵舟穿峡下
軽篙蹙破水中山
六如菴
桜の月も十三夜
八十叟
嵯峨法輪寺ハ
三月十三日
十三まゐり
男女
都鄙より
来て群集す
大かた寺だ
本尊
虚空蔵
菩薩
小福智
満の智
恵を授
十三才の年
おかれを
十三参とい

大堰川上春澹沱宿雨新霽花匹影山勞千粉撩人徹遊人傾城狂無那一輛草屐一枝蓀我亦村店買白墮醉来益覺興激昂松枝挂巾石上坐真箇移得畫圖渓曲々都被剩雲裏南岸花興北岸對落春猶相映曖鴨嘴之灘燕尾沙青幔碧毬一隊々細馬公子按玉羈畫舫佳人唱竹枝蝶誤濃香縫紅袖鶯啼艶雪點金巵少頃初月破煙濛流光赴花々朧朧何郎酒醒倩羅冷石家宴散錦障去君不見嵐山昔日種花辰山容學成芳野春々来去去茶開落今人行樂咲古人不知今春也電過風傷雨僁一夜莖

嵐山觀花歌　橘洲畑禎

宗祇法師菴
法輪寺の南二町許にあり 松尾西川法師の古跡なるべし 今西川桜といふあり

礫集　宗祇法師法輪寺のかたはらに菴をむすびて一とせあまり住侍れける時野州常縁とてひろう帰京するおりふし八月望の空さへくもりて雲むら〳〵立わたれる峯邊を見んと行く帰て宗祇の許へつかはしける

よそに見えし雲もまことにあらし山里の空さへくもる夕暮の空　　常縁

道令法師蹟
古老も法輪寺のかたはらにありといふ今さだかならず
道令は藤亜相道綱卿一男也
道令法師かくれありて後法輪寺の桜花
咲ころ花見んとて

玉葉
住人もなき宿なれはさくら花ちるをかなしむ人もなき世に　　赤染衛門

葉室西芳寺の林泉は夢窓国師古へに止錫の時洛陽深草地蔵尊来現して土石を運び共に作りなし名園となる其後應仁の兵火に荒蕪せしを伏見の修之助てふ者作りを補ふといふ 圖は築山庭造伝に見えたれば此に略す 原此寺は聖武帝天平年中行基大士の草創にして伽藍魏々たりしが年久しく遠に荒れんとせし時摂州の太守掃部頭大江親秀といふ人當山の檀越となりて夢窓国師を請じて再興に及ぶ

菱窓集
西芳精舎に御幸ありて古林の佳花を
叡覧ありける翌日にたてまつれる
めづらしき君がみゆきを松風にちらぬ桜の色と見るかな　　竹林院内大臣

御幸し
花の色に御幸ある老の身に千年の春の待けふかな　　夢窓

征東将軍尊氏西芳寺の花さかりにおはして
法談の後夢窓国師に
自集
心ある人のとひくる時こそあれて桜のさかり長閑く　　同

菟玖波集
文和五年三月西芳精舎の百韻連歌の中に
発句　道誉がもとの谷のぬるでを
忘れしな見しは昔の秋の菱の窓　　関白前太政大臣

日工集　永徳二年九月十三日義府君命赴西芳精舎紅葉會云云 和漢聯句
松にまじる紅葉ぬさきのみちの錦かな　　二条摂政殿

新勅
世をのがれて葉室といふ山里にありけるころ
侍りける花をみて読侍る
ひとりや桜は花も深し心さへもうき世にのがれ来ぬる　　前大納言光頼

定嗣卿山荘古蹟
葉室にあり 今定かならず

著聞集　葉室中納言定嗣卿は和漢の才先祖にも恥ざりければ寛元にその服暇をつとめ

とり仙洞の執権なりしがあるとき清閑の寺へ入りて菩提の
道心の底にや住しけん建長元年のころ葉室大納言の栖乃かたはらに
山荘をかまへられけるを同二年八月十三日ふとこれを引はらひて閑院摂政殿
摂政殿なとの人来られけるに上皇御幸ありて御遊ありしとぞ先
作られたるを一切にその体をなしつとやて同十四日の暁まうでけるに
みく秋の入ぬがしき程なるに宿執に住されて詩哥にはべりける　百練抄 同之

建長第二年余齢四十三仲秋八月三五夜出俗塵入佛道感懐内催獨吟外形而已

遁尋祖跡思依然葉室草菴雲石前願以勒王多日志博為見佛一乗縁暁辞東洛紅塵暗秋過西山白月圓発露涙零除髪芟開花勢盛観心蓮長寛亞相遁名夜満節先生掛官年新発意定然

又

陶令亮之歸休春秋四十三曾祖令遁俗八月十四日景気逢境自然銘肝昨仕朝端何所恥　同

葉室山わけ入る八百にはよそと入ぬる後の月そくもらぬ　同

極楽の道はこちらぞとあくる都の西なる山の[illegible]　同

桂山荘園林堂

下桂村にあり寛永の頃八条殿智忠親王の別業なり園林堂の額後水尾院の帝の製也諸人賦云今の京極家の別荘洛西林叢の冠たり豊太閤の指麾して小堀遠州の造る所といふ

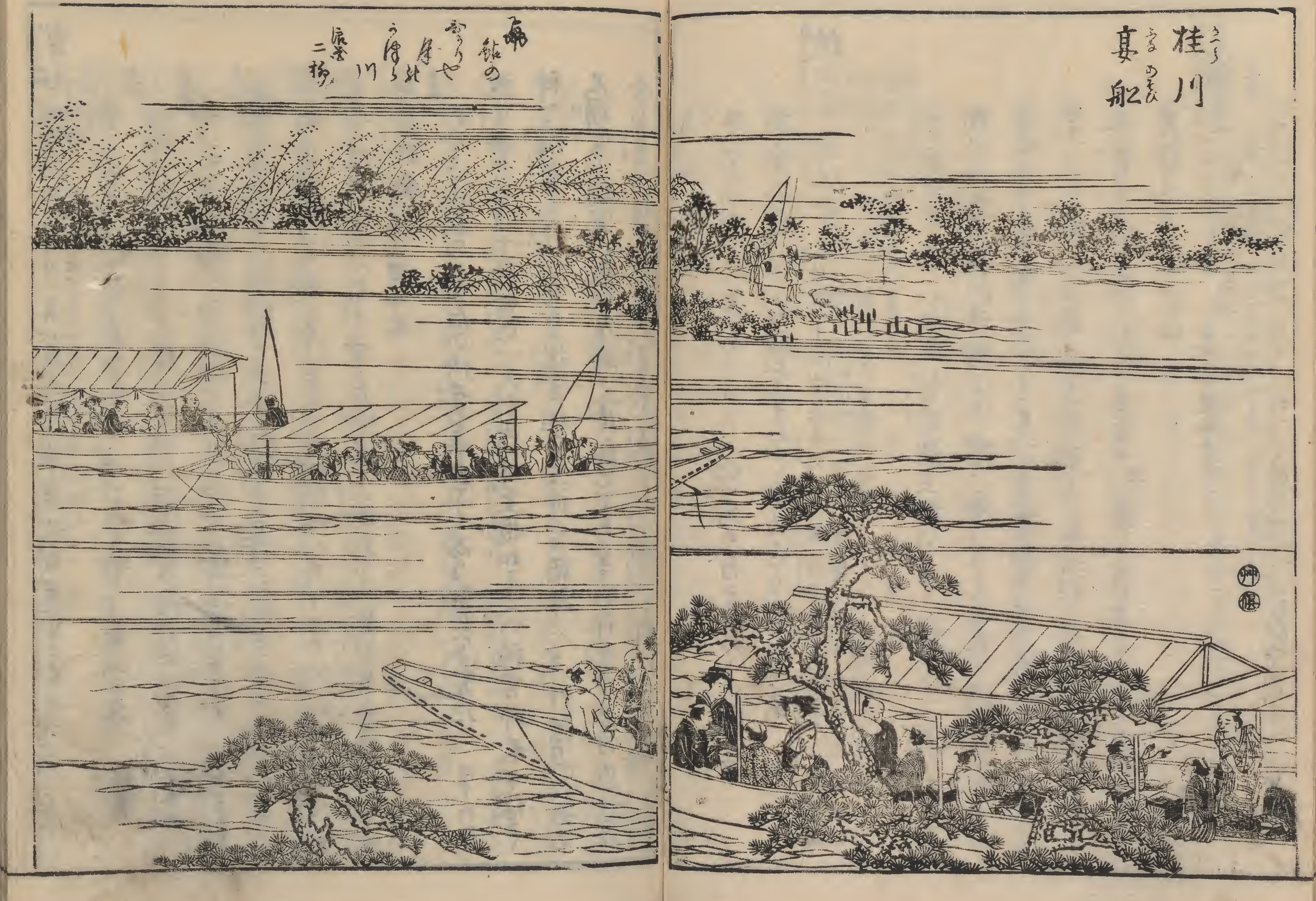
芳葉集詞書云

寛永の頃にや八条殿智忠親王都のほとり桂といふ所ありし先の宮は御時よりかの庵をうつし其所に住ひ給ひよせ給ふ御みかはもいくそばくひろうおもしろくつくりてさまざまの亭閣山水築さきたみなるへ桂川を前にて見わたしたる花の色かれ声山の木すゑ中なるはる見渡しけん見ゆ

元輔家

家集

桂に山荘ありしにや旧記に見えたり
清原納言の父なり
元輔が桂の家にて人々あまた集まりて人々つれづれなるにて
いかにしてとふとの事なるにて後の世までに思ひはらん　兼澄



桂川
宴船
南鮨の
雲らや
月北
うほら川
辰巳
二柳

男山 或雄徳山とも書り一名八幡山或ハ鳩嶺又翁嫗嶺ともいへ
山岑に八幡宮立せ給ふ石清水の靈泉あり

堀川百首
男山むかしにかへる花もまちわひてさやみの衣もむかしをうつへの外　仲実

月清
八幡山嶺にあらしの穂ふけは川波きよき淀のわけかの　後京極

家集
とひわけるやはたの山にや陰をとの鳩か聲する宮もさかふる　鎌倉右大臣

八幡宮放生會ハ初ハつくしの宇佐宮より興りてあまねくに傳りたるなりし
圓融院御宇天延二年宣旨云石清水八月十五日御雅樂寮准諸
節會延久二年八月十五日自今年上卿以下六衛府馬寮准行幸儀
扈從御輿 已上諸神記

夫木
たやこ山杖のみくばの御幸をや雲にもあそて見ハさるれ　法下行隆

放生會ハ八月十五日寅の一天別當神主撿知二人の神官神輿に詣く
神を鳳輦に遷しまゐらせ惣官祠官三神官諸神人及ヒ社僧及ヒ俗姓の
大禰宜小禰宜六位四座神人御劔太刀弓等の神寶を捧げ唐櫃九
合ならびに林邑の樂人音樂を奏し二の鳳輦に引綱駕輿丁ハ白兜
を冠り鉾八本細幡童子二人白幣獅子頭史生二人駒形児四人社務
三ヶ寺法院其外社僧神人神子社人数百余輩のごとく列りて前後の
松明数百の挑灯四方を照らしこれを拝せんとて左右の岸を傚ひ遠近
よりに集ひて群をなす時に神幸ハ猪鼻坂を下りて神輿ハ山下二の鳥居七本
松の下絹屋殿に着御あり茲に左右馬寮御馬を牽走二召使掌外記史
左兵衛府右兵衛府辨参議上卿左右衛府上﨟前駈等絹屋殿
に参向を待たまふ初のごとく供奉して宿院の頓宮に到る此時ハ
行幸の儀に准を拝し式ハ 後三條院延久二年より始る三神官ハ神
を頓宮に遷しまゐらせ鳳輦を北門の外神輿舎に置辨左右近衛参議
上卿ハ極樂寺礼堂に着座を神人ハみな東方の廻廊に屯して惣官祠
官神主伶人樂を奏し神官神人みな神供御酒及び造花の臺を
傳へ奥にて付し内蔵寮并に使式人進んで宮幣 宣命を神官に授く二ハ
則頓宮の前に献じ神官拝を修し祝詞を讀む左右馬寮御馬を

牽て舞臺を巡る事三匝於茲神宮の撤を上卿以下諸神人退出す其後伶人樂を奏し社僧鈍色の衣を着して高座に登る其余は舞臺に於て最勝王經を轉讀す其日暮に及んで還幸し玉ふ時上卿參議以下供奉せり頓宮南門の傍に列立して神拜あり社務長吏神人伶人社僧に淨衣を着し白杖草鞋各供奉して神を本殿に遷し樣を修し祝詞を捧てみな退散す翌十六日には放生川の汀に社僧出て誦經し魚鳥を河へ放つ是は最勝王經長者子流水品の池魚の事よりおこるとかやいひ侍へる

世諺問答云
八月十五日早旦に猪鼻を神輿にそへてまゐらせ奉しは帝の儀式にて有樂の聲雲をうごかし衣冠のきらほひ日にかゝやかりそれにより還幸のありさまも神人法師原に至るまて白杖をつきて歩てぬ道にあゆむなる儀式くまれや老翁に紅顏ありしも世路にかゝれども夕べに白骨となりて郊原にくちぬる世のありさまをしめし給ふ神慮の深き事なり

かくて有がたき事どもこれみな神佛の隔なきをしるべし云云

當社神式多かる中に特に絡しきは二月初卯日の御神樂又十二月十四日安居の神式ありしが慶長の比より絶しとぞ

八幡八景
雄德山松　安居橋月　極樂寺櫻　月弓岡雪　猪鼻坂雨　狩尾社客　放生川螢　大乘院鐘

海人藻芥云
八幡社務者武内大臣後裔也善法寺新善法寺田中善法寺

平等王院　檀竹　驗河小路　此家號祠官

茶畠の善法院の林泉は小堀遠州能本坊照乘翁の両舵之座中に太子形とよぶ水鉢あり又遠州好の茶亭もあり

松花堂　瀧本坊隣地泉之坊にあり照乘翁退隱の自坊之松花堂を茶室の號は數寄屋口牀半水屋壹牀二牀三疊竈物違棚あり古佛の唐戸を扉とし天井を落ちく縁屋根茅葺
額八分

杏花堂
比丘昭乘筆

入深　額六角　同筆

石燈爐　庭中にあり
松花堂尊前永代夜燈
慶安二年九月十八日　正良敬白
銘ニ曰

數寄屋待合に風流ありて座中より宇治川朝日山小倉池伏見澤田芙蓉木幡里城山釋に見えて無雙の妙景之泉の坊に藏るこれらも昭乘翁住して自画多し

萩坊　書院の画は狩野永德の筆也
かゝや麻かうぞは皮をもとの坊

八幡 泉坊
松花堂
待合
文明

昭乗翁 故居
待合

八幡安居の神事毎歳十二月十五日より松の本社より代出山下へうつしまゐらせ所中に逗留神前へ引宮寺祭礼執行なりいにしへは嚴重なりしが中絶して慶長の頃より再興ありとぞ見えし

松花堂全圖

覊旅漫集　悼南山松花堂

此老従来與俗殊自ラ二草隷ヲ得タリ規摸ヲ琰浮夢覚帰空界声価争伝水墨図

挙白集　八幡の能書坊ありけるに　長嘯

ゆくみやかわりとハされと書画の跡もとゝろふ袖ハぬれぬれく

其外猿猴坊も昭乗翁の棲ひし所ゝ書院の花香は画ハ永徳の筆也松花堂の書画多し又山下金剛院の客殿の画も永徳の筆あしらく其金極彩色王翦齢が西宮秋怨の詩のこゝろなり淀屋巨菴が舊屋ハ山下の所ゝ今ハ富丸氏ありて住り

山崎妙喜菴

大山崎離宮八幡の小側にあり禅宗聚家路東東福寺帰宗院の拖所之本尊ハ十一面観音成安ハ仏殿の額妙喜庵住慧ハ南宗筆書院の額ハ人物山水の画ハ永徳の筆同裏山水同筆　床張附　襖画　杉戸　裏　庵　松に鶴　襖　書中岩に尾長鳥共に永徳の筆也

茶室　侘庵の側にあり千ノ利休居士の営む所也二帖臺目四方錆壁

袖摺松　茶室の側にあり利休まてに幽棲の時秀吉公来臨しけるに袖を摺く茶亭へ入せ給ふとぞ古松高サ三丈余

芝山手水鉢　銘を蹲踞形也　茶室の東北庭中にあり芝山と

此数寄屋ハ世に名高く茶亭の規範とする也曽て豊太閤来駕の時今の地五十石を土産としたまふ今に寺に賜るとぞきこえし

山崎城 天王山の巓にあり初は山名赤松等築く所の城地也天正年中豊太閤と明智光秀と合戦ありし時陣所なり

相應寺 むかしは伽藍巍々として三代實録類聚國史にも見ゆ後世頽廢して今離宮八幡の東頬に小堂あり薬師佛を安ず土人新堂といふ

土佐日記

かくてさし上るに東のかたに山のよこをれるを見て人にとへば八幡の宮といふこれを聞てよろこびて人ゞをがみ奉る山崎の橋見ゆうれしきことかぎりなしこゝにて相應寺のほとりにしばしふねをとゞめてとかくさだむる事ありこの寺の岸のほとりに柳おほくありある人この柳のかげの川の底にうつれるを見てよめる哥

さゞれ波よするあやをば青柳のかげのいとしておるかとぞ見る

今昔物語

山崎に相應寺といふ寺あり其寺に壹演といふ僧住けり此本は俗也内舎人大中臣正棟といふ者也奈良の西の京に住しけり道心發して出家して後池邊の宮と申ける人の弟子として唐に渡る眞言を受習して法を修行せる事不怠歸朝して後彼相應寺に住して眞言の行法を修す

八十三叟

吉祥院村中
陽泉亭
林泉主人松翁造ス

人まきに
とてふ

同所
京屋弥生興

同所
藤屋
月興

はむ雪や
尾上をうつす
庭の松
書
曲木亭
同所
角屋
ととや
雪興
ゆきのたのしみ
大尾浦
青貝間
臥竜松

むかしも今も遊女の歌を世々の撰集にも撰れ高位に侍りし事も
ありしかや十訓抄といへる書に都ある藝能にほけて名をあげ賞を蒙る
その古今數をしるし侍ればあやしの賤の女あそびくゞつまでも郢曲に携れ
和哥を好むやからもかゝる人にもてなされ撰集を汚し其名をあらはさ
せける中に 亭子帝 宇多院 鳥羽院なとく御遊有ければこのひとしき
事なく人々ことに彼をしたふにあそびくゞつ川おほくして来集まりて其中に
うたひ聲よりためしとたまふに丹波守玉淵 参議音人が娘
白女と申せるを 帝御船に召して そく玉淵は詩哥にすぐれたりし
そのくちのむすめなればその哥どもよむ應しさらへくと仰られ題を
かく地の名やうかひを

ふかみどりかひある春にあふ時は霞ならねど立のぼりけり　白女

叡感ありて 帝あはれとおぼしめし御うち着一重を給せたり其外上達部
四位、五位のくさぐさのかづけものは二間ばかりにつもりしとかや

同女源實が筑紫へ下りける時山崎にて別を惜みける所にて

命だに心にかなふものならばなにか別のかなしからまし　白女

このよしは後に古今集にいれられたり 次の肥後國の遊女檜垣
の嫗は後撰集に入 神崎の遊女宮城は後拾遺集を 穢 青墓の傀儡
名曳は詞花集 ゆも江口の遊女妙は新古今の作者なりまでに
故實あまたの世々の撰集に入雲の上にも侍しけるとぞ申へし

かたるなと契し春は夢なれや稀さへかはる初雁の聲　遊女 大橋

宿かりをいふ僧となやましこれの那　同 十市

吉野さきを郭ありけり乃花菜さく人　同 小紫

入定の日とも志らずに彼岸日の那　同 仏生寺

枕とる痩寝覚へ生れ 明恨に　同 花咲

宵くの待身にはうき水鶏かれ　同 若菜

都林泉名勝図会跋

六条河原院乃むかしは塩竈を模せし古実ことに常にゆかしけるも
並の翁もすこし名尓しるへし源順か人物ハかゝれとも煙と消にき
如何ともそ時世ハ移りて悲しれとも風流殿しき跡せられし
其煙嘉風流も名跡なき以離れ尚ほ古事跡尓棲みを
いにしへをまするからに猶ゆかしきことを思ふよ
寛平法皇乃亭子院の泉園　中川の水を引入れし上東門院の
河原の庭の水　鳥羽の離宮　条主輔親の天の橋立なとも　唯
名のみ残りて悲しきかな　今ここかしこに遺れる所を見ん人何そ志の皆

満たしく書画工をしてうつさせて目て都林泉図会とふ
蓬窓図師の石に漱き水に枕し桐石河に海山を縮め
僊家乃自在に做ふ所をとらしめ又
清寺か庭しをも
林泉の図か美を撰
餘ハ尾に志るし侍る業乃かたし

寛政十一載仲冬

平安　秋里籬島　湘夕

畫工
法橋佐久間草偃
法橋西村中和
奥文鳴源貞章

京都　吉野屋為八
江都　須原屋善五郎

發行書肆

江戶日本橋南壹丁目　須原屋茂兵衛
同　二丁目　山城屋佐兵衛
同　二丁目　須原屋新兵衛
同　芝神明前　岡田屋嘉七
同　和泉屋吉兵衛
同　淺草茅町二丁目　須原屋伊八
同　兩國横山町壹丁目　出雲寺萬治郎
同　下谷御成道　紙屋德八
尾州名古屋本町三丁目　菱屋藤兵衛
大坂心齋橋通北久寶寺町　河内屋源七郎板